

研究ノート

紅葉賀巻の典拠

田村俊介

富山大学人文科学研究第85号
2026年9月 抜刷

紅葉賀巻の典拠

田村 俊介

第一節 二千一桁代・二〇一〇年代『源氏物語』作品論の優秀性

前拙稿「河内本源氏物語の改竄―尾州家本古写巻初期十一帖を中心に―」¹、前拙稿「帚木・夕顔・末摘花から葵迄の河内本」²では、第一帖～第九帖、第一一帖～第二二帖について、河内本本文が恣意的書き替えに拠って生じたものであることを述べた。これら以外の巻について、私は今のところ見出せていないが、同学、後進の皆様に拠って、現在河内本本文とされているもののほうが紫式部の原本に近いという巻が見出されるかもしれない。その場合、岩波新新大系『源氏物語』（仮名）、小学館新新全集『源氏物語』（仮名）は、河内本底本にすればいい。（岩波書店や小学館から新校注書が出るという話自体、あくまで、仮定の話である）

しかし、第一帖から第九帖まで、第一一帖から第二二帖まで、その中でも、特に第一帖桐壺に関しては、吉岡曠氏『源氏物語の本文批判』³の第一章をほとんどそのまま引用するという形で論述したのであるが、河内本側の書き替えと断定できる箇所が十余箇所に登った。一つの巻でこれだけの数に登るのだから、『源氏物語』全体に互って、青表紙本のほうが古態性を保っている、現時点では、推測して構わないのではないか。また、この問題を考える上で貴重な論文として、横溝博氏「平安時代の『源氏物語』本文―物語は本当に『書写』されたのか―」⁴が挙げられる。横溝氏は、藤原定家が、目の前にある『源氏物語』の写本を見て、紫式部の文才が「これを仰げばいよいよ高く、これを通していよいよ堅し」という認識を持ったという認識を示している。もう一つ、『源氏物語』が書写された回数はいずれも多かったという認識を示している。更に、菅原孝標女が『源氏物語』の文章に対し抱いた讃仰の気持ちは、藤

原定家のそれと同じであるという指摘をなさって居り、ここから先は私の推測であるが、菅原孝標女と同じく平安後期の『源氏物語』書写者達は、その半分以上は、菅原孝標女と同じく、ということは藤原定家と同じく「これを仰げばいよいよ高く、これを通じていよいよ堅し」という思いを抱いており、誤写こそあれ、恣意的に書き替えることなく鎌倉前期に藤原定家に渡したのではないかと思う。そのような理由で、二〇一〇年代に流通している青表紙本底本の『源氏物語』校注書たちは、振出しに戻って根本的に作り直さなければならぬ失敗作であるとは到底思えない。前述したように、今後の研究に拠っては、一部の巻は岩波新大系、小学館新全集の底本として河内本のほうが望ましいという結論が導き出されるかもしれないが、二〇二〇年代前半の現時点に於いて、岩波新大系、小学館新全集、岩波文庫等は正しいテキスト作りを行っていると考えるべきである。

にもかかわらず、これら青表紙本系大島本かそれに近い伝本を底本にしている岩波新大系、小学館新全集等を引用テキストにした、二〇一〇年代、二千一桁代の『源氏物語』作品論に対し、「新潮流」のかたがた、及び、新潮流に好意的なかたがた」がネガティブな発言をしているのは、残念でならない。読解至上主義の最右翼である私から見れば、「新潮流のかたがた、及び、新潮流に好意的なかたがた」は、二〇一〇年代、二千一桁代の『源氏物語』作品論を具体的な根拠を挙げて批判するという形を取っていない。武田信玄的に、平安文学の作品論という山に立てこもる旧潮流の人間に対し、ふもとから攻撃を仕掛け、『源氏物語』本文研究という原っぱに向かわせようとしている（「武田信玄的」と言う比喻が唐突だと思われる向きは、ヤフー等で、「武田信玄／第4次川中島の戦い」で検索されたい）。『源氏物語』なり『蜻蛉日記』なりの作品論ですぐれたものを書く能力に恵まれた若者が、『源氏』本文研究の工具書作りの下働きに駆り出されたというようなことが、それほど遠くない過去にあったのではなからうか。私自身、本文研究をやるくらいなら、中世文学の作品論をやりたい、という思いで、『源氏物語』研究から離れていた時期もあった。

★ まず、最初に考えたいことは、現在の読解至上主義とも言える状況である。この傾向は特に『源氏物語』研究に顕著であるものの、何も『源氏物語』研究に限ったことではない。学会発表などを拝聴する機会も多いが、いわゆる読みの発表が大半を占めており、中には興味深い指摘もあるものの、やはりつまらないものが多い。つまらないと感じる大きな要因は、先行説の補訂であつ

たり、どこかで聞いたような展開、さらには全くの妄想や思い込みのものまであるからだろう。読解研究は飽和状態にあるにも拘わらず、人材や時間が注ぎ込まれ続けている。それに見合うだけの成果に結び付いていれば問題ないのであるが、現状では疑問視せざるを得ない。同じ労力を読解以外の分野に援用すれば、かなり有効な議論を生み出すことも可能になるのではないか。

（松本大氏「享受研究の目的は何か、対象は誰か」⁶）

★

『源氏物語』研究が生氣も刺戟も失い、年ごとに面白さを減じている現在、この期に及んでなお、「青表紙本源氏物語こそ最も優れている」とか「まずは一つのテキストで読みを進めるべきだ」とかいった御託を並べる向きがあるとしたら、何故、それほどまで頑なに新編日本古典文学全集や新潮日本古典集成にしがみついているのか、確たる理由を聞かせて欲しい。

何か新しいものを見せてください。

私はもういちどやり直しますよ。

—ジョン・ケージ『サイレンス』

★

今回のシンポジウムにバネリストとして登壇することを、コーディネーターの今井上先生から打診され戸惑った。それは自身が『源氏物語』研究に明るい未来を思い描けないからである。以前、学会時評執筆時の際に記したとおり、もはや我々に出来ることは「落穂拾い」に過ぎないのでは、というのが稿者の本音である（注1）。その一方で、自身がベテランと呼ばれるべき年齢に達し、これから研究者としての歩みを始める若い方々を応援したいという思いを抱いていることも事実である。以下は、その葛藤から生まれた稿者なりの提言である。（星山健氏「立ち去る夕霧—玉鬘十帖、「野分」巻以降における機能の再検討—」⁸）

松本大氏の活字発表は二〇一七年一月なので、二〇一七年一月を起点として過去約五年間を振り返って、口頭発表がつまらないものが多かったということである。しかし、ある方面の研究が飽和状態と言う場合、その「研究」とは口頭発表も活字発表も含まれていないはずだから、二〇一七年一月を起点として過去約五年間の論文もつまらない、ということになるのではなからうか。つまらない

と思う原因は、先行説の補訂であつたり、どこかで聞いたような展開だからである、ということらしいが、それは、『源氏物語』のよ
うな研究の蓄積の多い作品では仕方がないことである。それでも一歩でも前進していれば、つまらない論文だとは言えまい。或いは、
どこかで聞いたような説でも、後に触れる今井上氏論文がそうであるように、当該巻他段落と当該巻以外の五十三の巻との記事に基づ
いて裏付けするという試みが成功していれば、それはそれで前進ということができる。

妄想、思い込みがある、とのことであるが、それについては、確かに、そのために、間違えや論拠薄弱言説が生まれることもあつた
のであろう。しかし、そうした論文がきっかけに、『源氏物語』に関心を持つ若者が増え、彼らが間違えを訂正して行けば、それで構
わないと私は思う。松本氏の記述の最終目的が、二〇一七年以前の五年間の口頭発表を否定することではなく、『源氏物語』の作品論を
成す研究者の目を、『源氏物語』の異本の本文や注釈書に向けさせることにあつたとしても、五年間に『源氏物語』作品論を発表した
者にとっては、「つまらない」は全面否定の言葉であり、爆弾発言と受け止められたことであらう。たとえ名指しされることがなくとも、
又、「若手と名乗ることすらおがましい未熟者であり、研究対象もかなりニッチな分野であるため、非常に偏った視点になろうこと
は明白ではあるが、ご容赦いただきたいことを冒頭でお断りしておく。」という前置きがあつても、聞き過ごせないのではなからうか。
私は当該五年間に、『源氏物語』作品論の口頭発表、活字発表をしていないが、もし私なら、根拠を示さず否定されることに、納得を
するわけには行かない。

松本氏が、本文研究や注釈書の研究に目を向けさせたがつてているのは、根底に「読解さえ行っていれば、享受のことなど気にしなく
てよい」と切り捨てているような論文や研究発表などを拝見すると、嘆かわしく思う」という認識があるのだらう。星印の文章のしば
らく後に、そのように記されていた。

しかし、『源氏物語』の享受の研究をするのならば、擬古物語を読むのが王道である。擬古物語『石清水物語』⁹には、『源氏物語』
を引用した詞章が数多くある。最近では、擬古物語が中世王朝物語と呼ばれることもあるのだが、『中世王朝物語全集』という叢書が、
笠間書院から刊行された。その中の『八重葎 別本八重葎』¹⁰の中の『八重葎』解題では、宇治大君と『八重葎』女主人公との人物造
型の類似性に触れるところがある。愛する男の思い出に、自分の美しい姿が残り、永遠の愛を勝ち取るために自死する女性について、

そういう願望を持つ女性はいても、それを実行する女性はいないと思うのだが、南北朝時代後半の『源氏物語』享受者も同じ認識を持っていたということが、『八重葎』女主人公の人物造型から窺える。擬古物語以外の中世文学に、『増鏡』もある。『増鏡』第一部について、『卷三 藤衣』冒頭が橘姫巻頭が踏まえられており、また、第三部については、『卷十七 月草の花』巻頭が、明石巻頭近くが踏まえられていることが、校注書で指摘されている（『増鏡』に関する言及は、講談社学術文庫本¹¹に基づく。後の成立年代の特定も、同文庫本に基づく）が、私は、第二部についても、宇治御幸の場面（上巻二五六頁九行目～二五七頁二行目。「第五 内野の雪」）で紅葉賀巻頭近くが踏まえられているなど、『源氏物語』の投影が看取できるように思う。

ただ、私は、『源氏物語』の作品論を成す研究者の皆さんに、『源氏物語』の享受の研究をオブセッションとして課すつもりはない。読解さえ行っていれば、享受のことなど気にしなくてよい、と切り捨てているような、昭和や平成の論文や研究書の中に、すぐれたものは数多くあるからである。（これこれのことなど気にしなくてよい、という論文や研究発表などを「拝見すると、嘆かわしく思う」という松本氏の言説は、他の研究者に対して、これこれのことを、オブセッションとして課しているように思える）しかし、享受の研究を成すなら、注釈書の場合、その注が、本当にその注釈書の時代の『源氏物語』享受の有様を映し出しているのか、それともその注釈書が取り入れた先行注釈書の時代の『源氏物語』享受の有様を映し出しているのか、それとも、その注釈書が成立した年の後に増補されて、その増補された時代の『源氏物語』享受の有様なのか分からない、という憾みがある。いつの時代の『源氏物語』享受の有様を映し出しているのか分からないという憾みは、異本を読むことで享受の研究をしようとする場合にも付きまとう。そうした研究が例外的にうまく行くこともあるが、エックス世紀に成立した伝本が、本当にエックス世紀の『源氏物語』享受の有様を映し出しているのか、それとも、当該本の親本の時代の、即ちエックスマイナス2世紀の『源氏物語』享受の有様を映し出しているのか、それとも、当該本の親本の親本の時代の、即ちエックスマイナス1世紀の『源氏物語』享受の有様なのか、それとも単純な誤写に拠って発生した異文なのか分からないという場合のほうが多いと思うのである¹²。右の三つの作品の場合、『石清水物語』は一二四九年～一二七一年¹³、『八重葎』は南北朝後半、『増鏡』は一三三八年～一三五八年、というように、二十年間、或いは、三十年間のうちに成立年代が特定されるから、享受史研究のためには第一級の史料ということが出来る。

ともあれ、松本氏の文章が『中古文学』誌に載ると、中古文学会で『源氏物語』の作品論の口頭発表をする会員がいなくなる。中古文学会の、或る一つの部会で数年間ゼロだったというのはそれならそれで構わないが、春秋の全国大会で作品論の口頭発表が数年間ゼロという事態に陥ったら、どうであろうか。会員一人一人の意思に拠り、数年間ゼロとなるのなら構わないが、「つまらない」と言われるのを恐れて、自分ではつまらなくないと思っている内容を口頭発表しなくなるのは、それこそ、つまらない事態である。

加藤昌嘉氏「脱文もあれば独自異文もある」は、初出¹⁴では、『源氏物語』研究が生氣も刺戟も失い、年毎に面白くなっている現在、この期に及んでなお、「青表紙本源氏物語こそ最も優れている」とか「まずは青表紙本で源氏物語の読みを深めるべきだ」とか「些細な異同を気にしていると本質を見失う」とかいった口上を述べ立てる向きがあるとしたら、何故、それほど頑なに小学館全集や岩波新大系や新潮集成にしがみついているのか、確たる理由を聞かせて欲しい。／何か新しいものを見せてください。私はもういちどやり直しますよ。 J・ケージ『サイレンス』であり、これを書き改めたい。しかし、面白くなっている、という

趣旨の言葉は、初出にも再録にもあるから、二〇〇一年四月に、最近の『源氏物語』の論文が面白くないと感じ、二〇〇一年四月以降二〇一一年前半までのものについても面白くないという評価が下されたのであろう。加藤氏は、「本文の揺れ、物語の揺れ」¹⁵の中では、「小学館日本古典文学全集や新潮日本古典集成に載る本文を原作者が書いたものであるかのように扱う作品論がいまだに発表されつづけているのは、いかにも滑稽なこと」と述べている。これは『狭衣物語』も視野に入れた言説ではあるのだが、今、『狭衣物語』は措くとして、『源氏物語』について、青表紙本系大島本より原作者の本文に近い本文の伝本名を言うことなしに、青表紙本系大島本底本活字校注書に基づいて作品論を成すことの対案を示すことなしに、このような言説が発せられたら、滑稽と言われるのがいやさに、作品論を成すことを止める人が続出するだろう。

加藤氏「脱文もあれば独自異文もある」の中で、第一〇帖賢木の河内本青表紙本の異同箇所が取り上げられている。

【P】大島本「櫛」巻（五ウゝ六オ）

きしかたゆくさき、おほほしつゞけられて、心よはくなき給ぬ。女は、「さしも見えじ」とおほしつゝ、むれど、えしのび給

はぬ御けしきを、いよ／＼心ぐるしう、なをおぼしとまるべきさまにぞ、きこえ給める。月もいりぬるにや、あはれなる空をながめつゝ、うらみきこえ給●に、こゝら思ひあつめ給へるつらさも、きえぬべし。やう／＼「いまは」とおもひはなれ給へるに、「さればよ」と、中／＼、心うごきて、おぼしみだる。

同じく「榊」巻の一節。大方の読者が知る大島本の本文を掲げた。光源氏が、伊勢に赴かんとする六条御息所を野の宮に訪うた場面であるのだが、光源氏が「うらみきこえ給」うと、どういうわけか、御息所は、胸中に積らせたつらさも消えてしまうようで、光源氏への想いを断ち切った心も揺らぐほどに惑乱した、という。いったい、何故、光源氏が恨み言を垂れると御息所のつらさが消えるのだろうか。たしかに、直前で、光源氏は「なを、おぼしとまるべきさまにぞきこえ給める」と説得しているのだけでも、それでも、右文の「うらみきこえ給」から「つらさもきえぬ」へ至る文の論理は、「に」が順接であろうが逆接であろうが、飛躍があつて納得しがたい。『源氏物語』研究者たちは、どのように理解しているのだろうか。

新編日本古典文学全集や新日本古典文学大系など諸注釈書は、「うらみ」を「かきくどき」に変換して訳している。しかし、「恨み言を述べる」を「心の中の想いをくりかえし訴える」に置き換えるのは、牽強附会ではないだろうか。或いは、ここに、あやにくな女心とか光源氏の魅力とか言外の余情とかいった評を持ち出す向きがあるとしたら、それは、最頁の引き倒しというものである。

大島本以外の写本で『源氏物語』を読んでいる者であれば、ここで首を傾けずとも済む。

と述べ、「大島本以外の写本」の本文として、河内本系尾州家本が、●の箇所「かつは、わがをこたりをも、ことはりしられぬべきこえつゞけ給」を持っていることを紹介している。

私も、あやにくな女心、光源氏の魅力、言外の余情には注目していない。注目したいのは、「うら」む、という動詞、漢字で書く「恨」む、である。「恨む」という動詞、その名詞化の「恨み」について、賢木以外の五三の巻の用例を列挙してみると、求愛、求愛す

る、の意の多いことに気付かされる。勿論、現代語の「恨む」の意で用いられることも多い。しかし、一度目の求愛について「恨む」が用いられることは決してないが、二度目、三度目の求愛については、一度目の求愛を拒否されたことの恨みの言葉、二度目の求愛も拒否されたことの恨みの言葉も含めて愛を囁く場合があり、それは『源氏物語』の場合、「恨む」、「恨み」という言葉になる。

○（夕霧）「六の君は、さりとてこの君にこそは、しぶしぶなりとも、まめやかに恨み寄らばつひには、え否び果てじ」（「宿木」〔四〕）¹⁶「この「恨み寄」る、は、六の君本人が匂宮に求愛するのではなく、六の君の父・夕霧が求婚」

○中宮をもまめやかに恨み申し給ふことたび重なれば（「宿木」〔四〕）¹⁷「この「恨み申」す、は、六の君本人ではなく、六の君の父・夕霧が、匂宮に求婚を申し込む、というもの。但し、交渉の相手は、匂宮本人か、匂宮の母か」

○せめて恨み深うは、この君【中の君】をおし出でむ（「総角」〔七〕）¹⁸

○このついでに、え籠め給はで【光源氏が、前斎宮に】うらみきこえ給ことどもあるべし。／ いますこしひがこともし給つべけれども、【前斎宮が】いとうたてとおほいたるもことほりに、わが御心も若くしうけしからずとおほし返して（「薄雲」第30節）
第31節。新大系（「うらみきこえ給ことどもあるべし」の部分、河内本系尾州家本も同文。薄雲卷第三〇丁表八行目以降参照）

第四例について補足説明をすると、「うらみきこえ給」が、「若くしうけしからず」と自己評価せざるを得ないような行いであった。その行いとは何か。それはかつての恋人・六条御息所の実の娘を、年齢差を顧みず口説く、という行いであった。第一例から第四例迄を考慮に入れば、光源氏が求愛し、六条御息所が「つらさも、き」ゆ、という心の状態になるという青表紙本文は充分に通じると判断したい。「恨み言を述べる」を「心の中の想いをくりかえし訴える」に置き換えるのは、牽強付会ではないのである。

もつとも、この異同個所について、「青表紙本文……紫式部の原典に近い 河内本本文……恣意的な書き替え」という結論は出せない。この箇所だけを見て、そのような断定をすることは、不可能である。要は、青表紙本でも通じるということである。加藤氏が、青表紙本文に違和感を持ったのは、賢木巻の文章を、賢木以外の五十三の巻及び賢木巻の他段落を視野に入れて読むという姿勢が欠

けているからであろう。いっぽう、二〇一一年一〇月を起点として過去一〇年間を振り返ってみると、一つの巻の文章を解釈するに当たって、他の五十三の巻と当該巻他段落の用例を念頭に入れており、大変すぐれた面白いものが多いと私は認識している。

星山氏の二〇二二年の活字発表に自己引用されている（注1として）「平成26年 国語国文学界の動向 中古散文」（『文学・語学』二一六）という学会時評は、二〇一六年八月のものであり、そこには「悲観主義者かもしれない。この業界に明るい未来は思い描けない。もう三〇年、いや二〇年でもいいから早く生まれてきていたらと思うことがある。ここまで研究が掘り下げられた状況において我々に出ることなど「落ち穂拾い」に過ぎないのではないだろうか」と述べられていた。二〇一六年八月を起点として過去二〇年ぐらい遡ると「落ち穂拾い」のような論文しかなく、『源氏物語』研究は飽和状態だと感じた、その後も、二〇二二年一月にも、二〇一六年八月から二〇二二年迄の論文を見渡すと、「落ち穂拾い」のような論文しかなく、『源氏物語』研究は飽和状態だと感じた、ということであろう。

この論文は、活字化の時点の起点として半年前のシンポジウム口頭報告を礎稿としている。フロアから、野分巻を解釈する際、野分以外の或る巻の叙述法を参照すべきではないか、という匿名の質問が出た（質問者は私ではない）。それに対する回答は、詳しくは言えないが、やや不十分であったような気がする。今井上氏が、「総括」（所収は、星山論文と同じ）に於いて、

星山氏の野分巻の読みなおしについてのところみ【『星山氏のシンポジウム報告』は、従来読み飛ばされがちであった細部に注目して興味深いものであったが、当日はフロアからの異見もあり、今後さらなる議論が期待されるところである。

と述べているのも、間違いなく、そのことを言ったものである。

やはり、星山氏にも、野分巻の文章を、野分以外の五十三の巻を視野に入れて読むという姿勢が欠けている。

一つの巻の訓詁注釈を、その巻以外の五十三の巻とその巻の他段落を念頭に置いて行うのが、今井上氏の「朝顔姫君の形象と主題」である¹⁹。今井氏は、

あらためて何かは見えむ人の上にかかりと聞きし心変はりを

について、第一に朝顔卷以外の「心変はり」の用例、『源氏』より少し前に成立した『一条摂政御集』の用例を集め、第二に、葵卷の彼女の心理を叙述した地の文「かゝることを聞き給ふにも、朝顔の姫君は、いかで人に似じと深うおほせば」（岩波新大系²⁰ 第一卷二九二頁）を引用しつつ（三〇頁上段。今井氏論文は新全集で引用）、「心変はり」が光源氏という男の心変わりであることを断定している。そして、論文は、愛の移ろいややささという大きな問題に発展している。

星山氏の言う「落ち穂拾い」の中に、今井氏の論文も含まれているのだろうか。それとも、二〇二二年よりも十年以上前だから、又、二〇一六年よりも十年以上前だから、含まれていないのだろうか。

いや、しかし、二〇一〇年代、二〇二〇年代のうち二〇二二年五月以前の『源氏物語』作品論にも、すぐれたものが多い。すぐれていて、かつ、「落ち穂拾い」を出発点にしつつ大きな問題にも発展しているものが多い。まだ飽和状態ではなく、一つの文章について、それ以外の五十三の巻と当該巻他段落、更には、短い作品なので常に有効な用例が見つかるとは限らないが『紫式部集』、『紫式部日記』を念頭に置いて解釈してゆく姿勢²¹を堅持すれば、二〇二〇年代にも、二〇三〇年代にも、いくらでも好論が出現するであろう。私も星山氏より年上で、勿論、ベテランと呼ばれるべき年齢に達している。そして、これから研究者としての歩みを始める若い方々を応援したいという思いを抱いている点も同じである。ところが、星山氏は、若い人が何をするのを応援したいのか、不明瞭である。恐らく若い人が様々な方面で活躍するのを全て応援なさるのであろう。私は、『源氏物語』作品論、『源氏物語』の訓詁注釈を志す若い人限定である。応援すると言っても、直接、作品論の中でもこういう方面に目を向ければかなり有効な議論を生み出すことも可能になりやすよ、と言って、何というか、何かをオプセッションとして課すみたいな形を必ずしも取らず、作品論の引用テキストと成る既刊活字校注書・新活字校注書は、おおむね、底本が青表紙本系大島本かそれに似た本文の伝本になるだろうが、そのような活字校注書を引用テキストにすることの正当性を保証するという間接的な形を取りたい。いつ、ちやぶ台返しされるか分からない状況では、気合が入らない。ちやぶ台返しされないちやぶ台、それが、大島本である。

次節では、私自身の訓詁注釈として、源典侍美声場面に着目したい。

引用テキストは、青表紙本系大島本底本（浮舟巻については、青表紙本系明融本など、少数の巻では、他の青表紙本）の校注書なら、どれでも良かった。迷うところであったが、今回は、岩波新大系を用いた。

第二節 源典侍美声場面の典拠

紅葉賀巻第22節、源典侍が琵琶の腕前を披露し、美声を聞かせる場面がある。

……【光源氏は】夕立ちして、なごり涼しきよひの紛れに、温明殿のわたりをたゞすみありき給へば、この内侍【「典侍」、琵琶をいとおかしう弾きぬたり。御前などにも、おとこ方の御遊びにまじりなどして、ことにまさる人なき上手なれば、ものうらめしうおぼえけるおりから、いとあはれに聞こゆ。」「瓜作りになりやしなまし」と、声はいとおかしうて歌ふぞ、すこし心づきなき。鄂州にありけむむかしの人も、かくやおかしかりけむと、耳とまりて聞き給ふ。

河内本は、「鄂州にありけむむかしの人も」が「文君などいひけむむかしの人も」である（尾州家本を引用した）。前にも述べたように、私は紅葉賀巻を含む、初期の約十帖について青表紙本のほうが紫式部の原典に近いと考えているため、「鄂州にありけむむかしの人も、かくやおかしかりけむ」に基づいて、この場面を訓詁注釈して行きたい。

新大系は、次のように施注する。

白楽天の詩「夜歌ふ者を聞く」（白氏文集十）を想起。鸚鵡（おうむ）州に泊まった作者が、月下の江上の隣船に女の美しい歌声を聞くが、その歌声はやがて泣き声に変わる。近づいて尋ねても、その十七、八歳の女は何も語らなかったという。

この典拠に関して、隣船の女が十七、八歳であるのに対し、源典侍は五十七、八歳である、その他さまざまな点で状況が異なるから、別に典拠があるのではないか、という声がよく聞かれる。しかし、私は、「醜女と度を越えた礼賛」という観点から、やはり、「夜歌ふ者を聞く」を典拠としても通じると考えている。容姿が劣った女性が、容姿以外の面で何か一つ良いところがあると、『源氏物語』では、度を超えて、その一つが賛美されることがある。末摘花が、光源氏の訪問を受けた年が明けた正月に、機知的な受け答えをした。その程度の機知は誰でも持っているものであり、ことさらに褒めることもあるまいに、一つ年を取っただけでこんなに機知に富んだ受け答えをする女性に成長するなんて夢みたい嬉しさと光源氏が発言する場面がある。引用したい。

「ことしだに声少し聞かせたまへかし。待たる、ものはさしをかれて、御けしきのあらたまらむなむゆかしき」との給へば、「さへづる春は」と、からうしてわな、かし出でたり。「さりや。年経ぬるしるしよ」とうち笑ひ給て、「夢かとぞ見る」とうち誦じて出で給ふ

（「末摘花」第24節）

この末摘花巻のみならず蓬生巻を繙いてみても、狭義の冗談が頻出するとは言えないまでも、どことなくユーモアを狙った表現が散見する。近江の君も、狭義の醜女とは言えなくとも、三枚目的な役柄であり、広義の醜女と言うことができる。彼女が中心となる諸段落でも、狭義の冗談とは言えないまでも、ややことを大袈裟にした、ユーモラスな表現が散見する。紅葉賀巻の第22節も、隣船の女が十七、八歳であるのに対し、源典侍は五十七、八歳である、その他さまざまな点で状況が異なっていたとしても、冗談で、醜女に度を越えた礼賛することができたとすれば、紫式部は、『白氏文集』巻十所収漢詩を引用することもあるうかと思われる。

もっとも、この第22節について、「青表紙本文……紫式部の原典に近い 河内本文……非古態性を持っている」という結論は出せない。この段落だけを見て、そのような断定をすることは、不可能である。要は、青表紙本でも通じるということである。前拙稿「若紫巻の垣間見の場面」²²で、吉澤義則氏を援用しつつ、橋姫巻の垣間見の場面の典拠は真剣になって考証すべきではない、結局は噴き出そうがための話柄なのだから、と申し述べたことがある。この場面についても、結局は冗談なのだから、典拠が「鄂州にあ

りけむむかしの人も」か、それとも、「文君などいひけむむかしの人」かを真剣に議論する必要はない、と冗談抜きに思う。

第三節 朱雀院行幸の典拠を巡って

紅葉賀巻第4節は、桐壺帝の朱雀院行幸が描かれる。

行幸には、親王たちなど世に残る人なく仕うまつり給へり。……

【略】

……、其夜、源氏の中将、正三位し給。頭中将、正下の加階し給。……

この行幸の典拠について、今井上氏は、「紅葉賀の行幸―平成の『源氏物語』研究の源流をさぐる―」²³に於いて、延喜一六（九一六）年の行幸説を紹介する。延喜一六年の行幸であれば、二か月前から準備していたという『源氏物語』の記述と合致する、と、浅尾広良氏の論文を援用しつつ、言っている。しかし当日の叙位が行われなかった点『源氏物語』の記述と背反する旨、高田信敬氏の論文を援用して述べている。

この延喜一六年のためしが以後は先例とされ、算賀行幸当日の賞は見られなくなるのであり、にもかかわらず物語において光源氏以下が当日に加階していることは、どう考えればよいか。

（九三頁九～一〇行目）

いっぽう、延喜六（九〇六）年の宇多法皇四十の賀を典拠とする説は、祝われる方が紅葉賀巻冒頭で四十歳であるという事実が、問題である。

結局、延喜一六年の行幸説、延喜六年の行幸説のいずれもが決定的な根拠を欠く、『源氏物語』の読者は醍醐天皇の時代にのみ二度あつ

た朱雀院の行幸を連想すべきである」という清水好子氏『源氏物語論』²⁴は、間違っている。今井氏の論をまとめると、以上のようになると思う。

明治四〇（一九〇七）年の夏目漱石『野分』は、第一章で主人公・白井道也が、新潟県で中学教師をしている。ところが、教え子とその保護者達からいじめられて、新潟県を去り、九州、中国地方を経て、東京に戻った。小説の最後で、新潟県時代の道也の教え子の一人・高柳が、次のように言う。

——先生私はあなたの、弟子です。——越後の高田で先生をいじめて追い出した弟子の一人です。

取り敢えず、新潮文庫『二百十日・野分』²⁵で引用したが、ここである「越後の高田」は、漱石の原稿では、「越後の高岡」であった。『ホトトギス』誌では、漱石が「中」の字を「後」に書き間違えたものと推測、「越中の高岡」に作る。実は、新潮文庫は、漱石が「田」の字を「岡」に書き間違えたかと推測していたのである。

新幹線富山駅は、新高岡駅と上越妙高駅のあいだにある。首都圏や関西圏の研究者はいざ知らず、私にとって、白井道也が中学教師をしていた街が「越中の高岡」か「越後の高田」かは、非常に大きな問題である。私は、「中」の字の間違い易さと「田」の字の間違い易さは同じぐらいであるから、「越後の高田」である可能性が五〇パーセント、「越中の高岡」である可能性が五〇パーセントと推定していた。しかし、正解は、「越後の高田」でも「越中の高岡」でも無かった、あくまで「越後の高岡」であった。夏目漱石は、新潟県の長岡市の風土を参考にして『野分』を書き、しかし、長岡市のイメージを悪くするという形でリアル世界の長岡市に迷惑を掛けることを忌避し、カモフラージュのため、「長」の字を「高」に変えたのである²⁶。『野分』の初めのほうの舞台は、実在しない架空の街だと考えなくてはいいけない。大正三年の『こころ』の先生とKの生まれ故郷が、新型県内の架空の市、或いは町であるのと同様である。原作者の思いは、できるだけ尊重されなくてはいいけない。昭和後期・平成・令和の日本で最も手に入りやすい『野分』のテキストは、新潮文庫『二百十日・野分』であろうが、その刊行によって、新潟県高田市は不当に悪いイメージを植え付けられてしまった。新潟県

長岡市に悪いイメージが付くのはまだよい。しかし、新潟県高田市、今は新潟県上越市高田に悪いイメージが付くのは、無実の罪で警察に逮捕されるようなものである。原作者の物語世界とは違うもう一つの物語世界があるから、それを尊重せよという主張に対し、例外もあるが原則として、同調できないのはこのためである。もう一つの物語世界とは、『狭衣物語』の場合、非深川本の世界であり、『野分』の場合、先生いじめの舞台を新潟県上越市高田とする新潮文庫的世界である。そのような世界に目を向ける気にはなれない。ちなみに、新潮文庫は、「越後の高田」と書いてその部分、漱石の原稿で「越後の高岡」だったことを、注にも解説にも、書き記していない。近現代小説に言及するのは、お叱りを受けるかもしれない。しかし、伊井春樹氏が夏目漱石の明治三十九年の小説に言及するのが許されて、田村が、夏目漱石の明治四〇年一月の小説に言及するのが許されないのは、どうしてだろうか。

明治三十九年の『坊ちゃん』について、伊井春樹氏『人がつなぐ源氏物語』²⁷では、現在流布のテキストで「……四国……」とあるところ、「中」の字が見え消ちされて「四」の字になった旨、紹介されている。

原稿【略】を見ると「中国辺」の「中」が消されて横に「四」とあるため、漱石は当初「中国地方」が念頭にあったようで、そのままなら広島か岡山あたりになっていたはずである。

小説『坊ちゃん』のぼっちゃん先生いじめは、白井先生いじめと、かなり似通ったところがあるのではないかと推測している。その主要舞台では、中学生は新任教師の寄宿先に忍び込み、蒲団の中にバツタを入れるような中学生であり、教師については、同僚を手練手管で宮崎県延岡へと追いやるような教師がいる。そのような悪いイメージが中国地方に付くことを忌避し、漱石は、「中」の字を消したのである。だとすれば、漱石の最終的な原稿をどこまでも尊重し、『坊ちゃん』の主要舞台は、四国の松山市だと思わなければならない（漱石は、明治二八年四月、教科は数学ではないが、松山市で中学教師をしていた。明治二九年四月、第五高等学校の教師として熊本市へ移住するのであるが、松山滞在期間たった一年間というのは、一つのエデュケーションの勤務年月としてあまりにも短い。漱石は、熊本市と違って、松山市に余り良い思い出を持ってなかったのではなかろうか）。一度書かれて、その後消された「中」という字が国民

の間に知られるのは、愛媛県松山市の住民や出身者にとっては、そのほうがいいかもしれないが、中国地方の住民や出身者にとって、迷惑である。

明治四一年の『三四郎』は、主要舞台が東京の本郷界限であることを隠そうとしないだけでなく、野々宮宗八が里美美禰子にプレゼントするためリボンを買った店が「兼康」であることも隠さない。

●野々宮君は早速店へ這入った。表に待つてゐた三四郎が、氣が付いて見ると、店先の硝子張の棚に櫛だの花簪だのが列べてある。三四郎は妙に思つた。野々宮君が何を買つてゐるのかしらと、不審を起して、店の中へ這入つて見ると、蟬の羽根の様なリボンをぶら下げて、／「あなたも何か買つたら、」どうですか」と聞かれた。

●三四郎の頭の中に、女の結んでゐたリボンの色が映つた。其リボンの色も質も、慥に野々宮君が兼安で買ったものと同じであると考えへ出した時、三四郎は急に足が重くなった。

(第二章)
(第三章) 28

兼康は江戸時代から続いている商店で、明治四一年、確かにその場所にあった。夏目漱石が「康」を「安」にしたのは、誤字か何かのせいであつて、カモフラージュしたかったのではあるまい。兼康は、小説『三四郎』の中で店の不名誉になるようなことが全く描かれておらず、カモフラージュする必要が無いのである。

紅葉賀巻の行幸も、紫式部は、わざと延喜六年の行幸とも延喜一六年の行幸ともぴたりとは重ならないようにしたのはないか。ぴたりと重なると、桐壺帝がリアル世界の醍醐天皇であることが世に周知される。桐壺帝は、たくさん女御、更衣を持つており、その、女同士の争いが原因で最愛の更衣が三十代の若さで、或いは、ひよつとすると三十に達しない若さで、死んだ。三十に達しない場合は勿論、三十代であつたとしても、桐壺帝に悪いイメージが付く出来事である。リアル世界の醍醐天皇は、御存命なら、自分がそのように描かれていることに関し、必ず、紫式部に抗議したはずである。醍醐天皇が崩御遊ばされたなら、その子孫のかたがた、その他御関係のかたがたが、必ず抗議したに違いない。そのような意味で、『源氏物語』の読者は「醍醐天皇の時代」にのみ二度あつた朱雀院の行

幸を連想すべきである」という清水好子氏『源氏物語論』に否定的な立場を取る今井氏に、心から賛意を表したい。桐壺天皇は、架空の人物であった。ただ何となく、『源氏物語』前編の舞台が、今より一世紀程前だ、或いは、半世紀程前だと読者が感じ取ることになれば、紫式部はそれで満足だったのである。

注

- 1 『富山大学人文科学研究』第八三号、二〇二五年九月。
- 2 『富山大学人文科学研究』第八四号、二〇二六年三月予定。
- 3 笠間書院、一九九四年。
- 4 『新時代への源氏学』第七卷。竹林舎、二〇一五年。
- 5 『中古文学』第一〇〇号（二〇一七年二月）所収「注釈書のために」の工藤重矩氏の呼称。非青表紙本、若しくは非大島本を尊重し、伝本一つ一つにそれぞれの物語世界があると考える立場。「一つ一つの本文を、他本との校合によつて読むのではなく、あくまでもそれぞれの物語世界を持つ作品として解釈」する（伊井春樹氏『源氏物語論とその研究世界』（風間書房、二〇〇二年）三九九頁）ことを重んずる研究者たち。私は旧潮流の立場に立つ。
- 6 『中古文学』第一〇〇号。二〇一七年十一月。
- 7 『揺れ動く『源氏物語』』所収。勉誠出版、二〇一一年。
- 8 『中古文学』第一一〇号。二〇二三年十一月。
- 9 桑原博史氏『中世物語の基礎的研究』（風間書房、一九六九年）第六章などで、取り上げられている。
- 10 神野藤昭夫氏校訂・訳注。二〇一九年。
- 11 井上宗雄氏。上巻・中巻・下巻。一九七九～一九八三年。
- 12 こうした考え方は、前拙稿「源氏物語宿木後半評釈（2）」（『富山大学文学部紀要』第七五号。二〇二二年八月）の二四二頁でも、述べたところである。
- 13 『石清水物語』の成立の上限については、二年程度の揺れ動きがあるかもしれない。下限については、この年に『風葉和歌集』が成立しているので、動かない。
- 14 『源氏研究』第六号（二〇〇一年六月）所収「源氏物語のさまざまな貌——文化でなく文献でなく——」
- 15 所収は注7に同じ。
- 16 宿木巻の引用は、前拙稿「源氏物語宿木前半評釈（1）」（『富山大学文学部紀要』第六五号。二〇一六年八月）に拠った。

17 注16に同じ。

18 総角巻の引用は、前拙稿「源氏物語総角前半評釈(2)」(『富山大学文学部紀要』第五九号。二〇一三年八月)に拠った。

19 『中古文学』第七三号。二〇〇四年五月。

20 岩波書店発行新日本古典文学大系の略称。

21 こうした姿勢について、前拙稿「河内本源氏物語の改竄―尾州家本古写巻初期十一帖を中心に―」では、「五三の巻と当該巻他段落主義」と呼んだ。
『五三の巻と当該巻他段落主義』は、アントワース・コンパニオン氏「文学をめぐる理論と常識」(岩波書店、二〇〇七年。中地義和氏・吉川一義氏訳)の、主として七〇頁から一〇三頁迄で述べられている「比較断章法」(パラレルシュティンメトード)と似通ったところがある。「比較断章法」とは、具体的には、次のようなものである。「ボードレールの「旅」(「悪の華」第二版を締めくくる長大な詩)の詩句「有限な大海原のうえでわれわれの無限を揺すりつつ」に出てくる名詞、無限の意味を明らかにする場合「Bergant notre infini sur le fini des mers」に出てくる名詞 infini の意味を明らかにする場合、ということであろう。田村注)、私はまず第一に二八六一年の「悪の華」第二版に出てくる同じ語のふたつの用例を検討し、そのあとで同じ語がもっと頻繁に使われている「バリの憂鬱」を調べ、しかるのちにミュッセやユゴー、レオバルディ、コールリッジ、ド・クインシーなどの用例へと向かう。意味不明の語の意味を明らかにするには、別の作者の一節よりも、同じ作者の比較断章のほうがつねに重視されるようだ」(七四頁)。作者の死を宣言したバルトも、バルザックの『サラジヌ』の解釈・鑑賞をするに当たって、同じ作者の『知られざる傑作』の詞章を用いている、即ち、彫刻家サラジヌの振舞いに、画家フレンホフェールと似通うところがある旨、指摘している(八一―八二頁)。「アントワース・コンパニオン氏は、ロラン・バルト氏が、c'est ce qu'un autre artiste balzaicien, Frenhofer, demande à la toile idéale dont il rêve」と述べているのを受けて、このように言いたらしい。『S/Z』(初版は一九七〇年)(Seuil社、一九七六年)一一八頁四―五行目。以上、田村注]

『文学をめぐる理論と常識』は、本拙稿本篇の冒頭近くで挙げた横溝氏論文の注の部分でも、肯定的引用がされている。横溝氏は、七つの章のいずれかを引用したというより、コンパニオン氏著書の全体を踏まえ、「作者」という記号を徹底して排除して思考するのは容易なことではない」と述べたのである。私も、横溝氏の、コンパニオン氏著書理解に賛成する。

22 『富山大学文学部紀要』第七六号、二〇二二年二月。

23 久保朝孝氏編『危機下の中古文学2020』。武蔵野書院、二〇二一年。

24 塙書房、一九六六年。

25 一九七六年

26 一九九四年の岩波書店発行『漱石全集』第三巻の第三刷(二〇〇二年)の五三九頁下段。

27 朝日出版社、二〇二一年。

28 『三四郎』の引用は、『漱石全集』第四巻(岩波書店、一九六六年)に拠った。引用者が、隅付きパーレン括弧に包んで、言葉を補ったところもある。

【二〇二六年四月二〇日提出】